

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：37303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700695

研究課題名(和文) 近世武芸概念の形成過程についての研究 近世兵法書、近世思想書を中心に

研究課題名(英文) The Formation of the concept of Bugei in the early modern period -based on a Review the Heiho series in the early modern period-

研究代表者

田井 健太郎 (TAI, KENTARO)

長崎国際大学・人間社会学部・助教

研究者番号：00454075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：士大夫、戦闘者両面の性格をもつ近世武士の再生産は、日常の行いや武芸の稽古を通して行われる。戦闘者としての修養ともみられる稽古の中にも、士大夫として存する武士像の創出も見据えられている。これは、「武」の稽古によって思想あるいは倫理を体得する教育システムの一形態であり、身体技法特に武技に関する技芸の修練が修行者の思想形成に影響するという伝統的な身体運動文化の特質を形成する祖型の一つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The reproduction of the bushi with the both character of a statesman and a combatant sides, was carried out through the practice of everyday act and military arts. In the practice to be thought to be the cultivation as a combatant, the creation of the ideal bushi to keep as a statesman was fixed its eyes on. This is one of the forms to acquire thought or an ethic in experience by a practice of physical techniques. It is thought that it will form one of the characteristics of the traditional physical arts culture that the practice of the military art influences the thought of the practitioner.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：近世武芸 近世兵法書 山鹿流兵法

1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会体育・保健部会において改定作業が進められた新学習指導要領の完全実施が中学校では平成 24 (2012)年、高等学校では平成 25(2013)年より学年進行ではじまる。ときに、文部科学省のねらいは、「ゆとり」教育の見直しと以前の「詰め込み」教育の反省を踏まえた、「生きる力」を育むことを目指すとされる。その内実として、基礎的な知識、技能の修得と思考力、判断力、表現力の育成がことさらに強調されている。同時に、中学校保健体育科においては、武道が必修科目として扱われることになった。新学習指導要領に記載される条文から武道の独自性をあげるとすれば、「武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとする」ということや「伝統的な考え方」の理解ということになる。「伝統的な行動の仕方」とは、日本の中で培われてきた独自の身体運動形式のことを指していると考えられる。これは特異な現象ではなく、世界中のあらゆる地域の生活世界の中に固有の文化的特殊性を帯びた身体技法がみられることからみても、我々自身の身体運動形式は何処かに存在し、その一面を武道に求めていることは妥当なものと解される。また、陸上競技や球技などの種目がおおむね「互いに協力」することを目標として提示しているのに対し、武道では「互いに相手を尊重」することを目標とするのは、格闘競技としての性格のみならず、運動形式を超越した独自の倫理性が一般に認められ、その貢献を期待されていることが注目される。

しかし、こうした一般的理解を超えた上での武道の持つ特異性については、未だ全てが明確にされていない。最も根源

的な問いである「武道とは何か」という問いへの探求でさえ、終極には及んでいない。近年の武道教育への期待は、何かしらの武道への想念に基づいていると考えられるが、その内実や如何にという問いへの解答がない限りは、何を指し、何を伝えるのかは不明確なままといえる。そうした背景の中で武道の伝統性の淵源を考えることは、今改めて重要になっているのである。

2. 研究の目的

学校教育を中心に武道への教育的期待が強まる中で、日本古来の身体文化に関する基本的な概念は不明確な部分も多くある。そこで本研究では、武道の主要な性質が成立したと考えられる近世初期に焦点をあて、近世思想書および戦争術であり政治術のテクストともいえる「兵法書」を資料として近世武芸概念の形成過程について明らかにすることを目的とする。

具体的な課題としては、(1) 近世武芸の戦闘技法構造の解明、(2) 近世思想書、近世兵法書における武士観念の異同と影響関係について、(3) 近世武芸に存在する武士倫理性の検討、(4) 武芸を用いた武士教育の内容について検討することを課題とする。

3. 研究の方法

近世における武芸概念の構成契機として「体技性(身体技法性)」、「芸道性」、「士分性(武士身分性)」の三つをあらかじめ措定しそれぞれの視点から近世思想書、近世兵法書資料にあたっていく。それぞれの視点について特に集中的に用いる課題をあげると、(1) 戦闘技法構造の解明には「体技性」、「芸道性」、(2) 近世思想書、近世兵法書における武士観念の検討には、「士分性」、(3) 近世武

芸に存在する武士倫理性の検討、(4) 武芸を用いた武士教育の内容には、「体技性」、「芸道性」、「士分性」の全てが方法的視座となる。

4. 研究成果

2011年度から2013年度に至る3年間の本研究プロジェクト期間において、6編の学術論文(うち2編は印刷中)と7本の学会発表および資料調査研究活動を行った。

初年度の研究活動実績としては、【平成23年6月】長崎県立歴史博物館(長崎市)所蔵の近世兵法資料『兵法大事』、『兵法神文鈔』の資料撮影、蒐集作業、【同年9月】日本武道学会第44回大会(勝浦市)に参加し、本研究課題に関連する近世武芸、近代武道についての研究発表から情報収集および関連分野の研究者との意見交換会、【平成24年2月】長崎大学(長崎市)にて本研究課題から派生する「身体教育」に関するシンポジウムの開催に向けて研究内容とシンポジウムテーマの打ち合わせ、【同年2月】示現流兵法史料館、鹿児島県歴史資料センター(鹿児島市)において、近世武士身分性の形成と武芸の関連について調査、【同年3月】筑波大学にて「身体教育」に関するシンポジウム(日本体育学会大会および日本体育・スポーツ哲学学会にて開催予定)打ち合わせを行った。

二年目の研究活動実績としては、【平成24年4月】日本体育スポーツ哲学学会大会におけるシンポジウム開催について研究者協力者と企画案の調整を行った(東京都)、【平成24年5月】日本体育学会体育哲学専門領域定例研究会(東京都)に参加し、当該領域の最新知識について研究協力者と意見交換を行った、また日本体育スポーツ哲学学会大会におけるシンポジウム開催について当該研究者と企画案の調整を行った、【平成24年6月】IMACSSS(国際武道学会大会:イタ

リア)での研究発表を行い('How Japanese Budo is a physical arts: The Conceptual Establishment of Martial Arts in Early Modern Japan')プロシーディングを発行した、【平成24年7月】日本体育学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会に参加し、当該領域の最新知識について研究協力者と意見交換を行った、また日本体育スポーツ哲学学会大会におけるシンポジウム開催について当該研究者と企画案の調整を行った、【平成24年8月】日本体育スポーツ哲学学会大会に参加し、シンポジウムを開催した。前年度に実施した史料調査、山鹿流兵法書の史料分析をもとに国際学会、シンポジウムを含め成果発表を行った。翌年度のシンポジウム開催(二回)、書籍発刊の準備などをすすめることができ、総じて研究は順調に進展しているといえる。

最終年度の研究活動実績としては、【平成25年6月】日本体育学会大会におけるシンポジウム開催について研究者協力者と企画案の調整を行った(横浜市)、【平成25年7月】筑波大学付属駒場中学校にて、「武道をゆく～形・型を通して武道に触れる～武術・武芸・武道」の講師として研究成果について発表した、【平成25年8月】日本体育スポーツ哲学学会大会に参加しシンポジウムを開催した、【平成25年8月】日本体育学会大会に参加しシンポジウムを開催した、【平成25年9月】日本武道学会および国際武道会議にて研究発表を行い、proceedingを発表した。

武道の主要な性質が成立したと考えられる近世初期に焦点をあて、「兵法書」を資料として近世武芸概念の形成過程について明らかにすることを目的とした。

山鹿流兵法書『武教本論』の中で、山鹿素行は、「武教」は、「文教」を兼ね、世界の理である「大原」篇と教養の綱領である「主要」篇を「本」として修めた上で、戦闘理論である「戦略」篇を修得するよう述べられる。素

行における武士身分観は、まずもって文教であり、勇を性格とする武士に教えがなければ、「猛に乱に」と弊害がおきると説かれる。統治者と戦闘者が合わさった武士観に素行が説く兵法思想の根幹があることが確認された。

兵法入門者への指導法を表した『武教小学』には、士としての常の行いの教授がある。それらを先に見た士大夫的「士」観と戦闘者的「士」観の二点から整理した。士大夫的作法は、日々の礼を伴った作法によって忠孝を尽くすことにその目的がある。注目すべきは、一般武士の中では、兵法学者の門人になることでは、道徳的な身のおき方、作法を学ぶ機会でもあったことである。また、戦闘者的作法の教授内容においては、戦闘者としての鍛練として、戦術的な要素、つまり、地形や兵卒の運用だけでなく、自らの身体の鍛練、個人の戦技を錬磨することが示される。もっとも、芸道化がはやくに進んだ御馬の技法においてさえ、見た目の良さに囚われない実利的な技法の習得が求められるのである。こうした戦士としての鍛練の基準は戦国期の武士と同様のものである。

近世の世の中が安定するにつれ、朱子学的武士観が広がり、合戦術である兵法も「治国之術」と規定された。ただし、武士が戦士であるという前提をあくまで維持し、「士」に治国の人と戦士という二語の意味を見出す観点を強く押し出している。そうした結果、「士の法」、「士の道」として兵法を規定し、兵法の合戦技法性の維持や兵法原理の普遍化に表れ、戦技錬磨がなされていた。

武と文を学ぶことが四民の長としての武士の役割である。士大夫、戦闘者両面の性格をもつ武士の再生産は、日常の行いや武芸の稽古を通して行われていた。一見すると戦闘者としての修養ともみられる稽古の中にも、士大夫として存する武士像の創出も見据えられていた。これは、「武」の稽古によって

思想、あるいは倫理を体得する形態の一つといえ、この後に思想、倫理の変化こそあれ、身体技法、特に武技に関する技芸の修練が修行者の思想を形成するという伝統的身体運動文化の特質の一つを形成することになったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計6件)

1. 田井健太郎, 佐々木究, 近藤智晴, 中澤篤史, 中嶋哲也(印刷中) 体育哲学を再考する - 体育原理論の応用可能性 - . 体育・スポーツ哲学研究 36 (1): 45-54 .
2. 田井健太郎, 佐々木究, 谷知典, 遠藤俊典, 上田丈晴(印刷中) スポーツ実践の思想 - 実践思想の現在 - . 体育哲学研究 .
3. 今村裕行, 吉村良孝, 飯出一秀, 田井健太郎 (2012) 体育としての空手道 - 体力学的側面 - . 長崎国際大学論叢 12 : 87-94 (平成 24 年 3 月)
4. Kentaro TAI (2013) The Formation of the warrior's status through physical techniques in the early modern period - based on the review of Review of the Yamaga-ryu Heiho series - . Proceedings of 2013 International BUDO Conference by the Japanese Academy of BUDO : 44-45 . (Sep, 2013)
5. 田井健太郎, 阿部悟郎, 釜崎太, 佐々木究 (2013) 体育哲学を再考する - 「体育原理論」のこれまでとこれから - . 体育・スポーツ哲学研究 35 (1): 51-59 (平成 25 年 6 月)
6. Kentaro TAI (2012) How Japanese Budo is a physical arts: The Conceptual Establishment of Martial Arts in Early Modern Japan . Proceedings of the 1st

IMACSSS International Conference:147
(June , 2012)
〔学会発表〕(計 7 件)

1. Kentaro TAI (2013) The Formation of the warrior's status through physical techniques in the early modern period –based on the review of Review of the *Yamaga-ryu Heiho series-* . 2013 International BUDO Conference by the Japanese Academy of BUDO (Tsukuba, Sep 10-12, 2013).
2. 田井健太郎, 佐々木 究 (2013) シンポジウム A . 提案趣旨「スポーツ実践の思想 実践思想の現在」第 65 回日本体育学会大会 (平成 25 年 8 月 於 : 立命館大学)
3. 田井健太郎, 佐々木 究 (2013) シンポジウム 提案趣旨「体育哲学を再考する –体育原理論の応用可能性」. 第 35 回日本体育・スポーツ哲学会大会 . (平成 25 年 8 月 於 : 明治大学)
4. 田井健太郎 (2013) 「 武道をゆく ～ 形・型を通して武道に触れる～」筑波大学付属駒場中学校総合学習講演、 (平成 25 年 7 月 於 : 筑波大学付属駒場中学校)
5. 谷木龍男, 麓正樹, 田井健太郎 (2013) 空手道の可能性について: 大学授業の実践 . 日本武道学会空手道専門分科会ワークショップ (平成 25 年 3 月 於 : 京都大学)
6. 田井健太郎 (2012) シンポジウム 提案趣旨「体育哲学を再考する – 「体育原理論」のこれまでとこれから-」. 第 34 回日本体育・スポーツ哲学会大会 . (平成 24 年 8 月 於 : 大阪大学中之島センター)
7. Kentaro TAI (2012) How Japanese Budo is a physical arts? : The Conceptual Establishment of Martial Arts in Early

Modern Japan . 1st IMACSSS
International Conference (Genova, June
8-10, 2012)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織
(1) 研究代表者
田井 健太郎 (TAI , Kentaro)
長崎国際大学・人間社会学部・助教
研究者番号 : 00454075

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者